

文
章

芥
川
龍
之
介

「堀川さん。弔辞を一つ作ってくれませんか？ 土曜日に本多少佐

の葬式がある、——その時に校長の読まれるのですが、……」

藤田大佐は食堂を出しなにかう保吉へ話しかけた。堀川保吉はこの学校の生徒に英吉利語の訳読を教えている。が、授業の合い間には弔辞を作ったり、教科書を編んだり、御前講演の添削をしたり、外国の新聞記事を翻訳したり、——そう云うことも時々はやらなければならぬ。そう云うことをまた云いつけるのはいつもこの藤田大佐である。大佐はやつと四十くらいであろう。色の浅黒い、肉の落ちた、神経質らしい顔をしている。保吉は大佐よりも一足あとに薄暗い廊下を歩みながら、思わず「おや」と云う声を出した。

「本多少佐は死なれたんですか？」

大佐も「おや」と云うように保吉の顔をふり返った。保吉はきのうずる休みをしたため、本多少佐の頓死を伝えた通告書を見ずにしまつたのである。

「きのうの朝歿なくなられたです。脳溢血のういつけつだと云うことですが、……
じゃ金曜日までに作って来て下さい。ちようどあさつての朝までにで
すね。」

「ええ、作ることは作りますが、……」

悟りさとの早い藤田大佐はたちまち保吉の先まわりをした。

「弔辞しよじを作られる参考には、後ほど履歴書りれきしよをおとどけしましょう。」

「しかしどう云う人だったでしょう？ 僕はただ本多少佐の顔だけ
見覚えているくらいなんです、……」

「さあ、兄弟思いの人だったですね。それから……それからいつ
もクラス・ヘッドだった人です。あとはどうか名筆よみかを揮ふるって置いて下
さい。」

二人はもう黄色きいろに塗ぬった科長室の扉ドアの前に立っていた。藤田大佐は
科長と呼ばれる副校長の役をしているのである。保吉はやむを得ず弔
辞しよじに関する芸術的良心ほうてきを抛擲なした。

「資性穎悟と兄弟に友にですな。じゃどうにかこじつけましよう。」

「どうかよろしくお願いします。」

大佐に別れた保吉は喫煙室へ顔を出さずに、誰も人のいない教官室へ帰った。十一月の日の光はちょうど窓を右にした保吉の机を照らしている。彼はその前へ腰をおろし、一本のバットへ火を移した。弔辞はもう今日までに二つばかり作っている。最初の弔辞は盲腸炎になった重野少尉のために書いたものだった。当時学校へ来たばかりの彼は重野少尉とはどう云う人か、顔さえはつきりした記憶はなかった。

しかし弔辞の処女作には多少の興味を持っていたから、「悠々たるかな、白雲」などと唐宋八家文じみた文章を草した。その次のは不慮の溺死を遂げた木村大尉のために書いたものだった。これも木村大尉その人とは毎日同じ避暑地からこの学校の所在地へ汽車の往復を共にしていたため、素直に哀悼の情を表することが出来た。が、今度の本多少佐はただ食堂へ出る度に、禿げ鷹に似た顔を見かけただけである。のみ

ならず弔辞を作ることには興味も何も持っていない。云わば現在の堀川保吉は註文を受けた葬儀社である。何月何日の何時までに竜燈りゆうとうや造花を持って来いと云われた精神生活上の葬儀社である。——保吉はバツトを啣くわえたまま、だんだん憂鬱になりはじめた。……

「堀川教官。」

保吉は夢からさめたように、机の側に立った田中中尉を見上げた。

田中中尉は口髭くちひげの短い、まるまると顎あごの二重になった、愛敬あいきようのある顔の持主である。

「これは本多少佐の履歴書だそうです。科長から今堀川教官へお渡ししてくれと云うことでしたから。」

田中中尉は机の上へ罫紙けいしを何枚も綴とじたのを出した。保吉は「はあ」と答えたぎり、茫然と罫紙へ目を落した。罫紙には叙任じよにんの年月ばかり細かい楷書かいしよを並べている。これはただの履歴書ではない。文官と云わず武官と云わず、あらゆる天下の官吏なるものの一生を暗示する象徴

である。……

「それから一つ伺いたい言葉があるのですが、——いや、海上用語じゃありません。小説の中にあつた言葉なんです。」

中尉の出した紙切れには何か横文字の言葉が一つ、青鉛筆の痕を残している。Masochism —— 保吉は思わず紙切れから、いつも頬に赤みのさした中尉の童顔へ目を移した。

「これですか？ このマソヒズムと云う……」

「ええ、どうも普通の英和辞書には出て居らんように思いますが。」
保吉は浮かない顔をしたまま、マソヒズムの意味を説明した。

「いやあ、そう云うことですか！」

田中中尉は不相変晴ればれた微笑を浮かべている。こう云う自足した微笑くらい、苛立たしい気もちを煽るものはない。殊に現在の保吉は実際この幸福な中尉の顔へクラフト・エビングの全語彙を叩きつけてやりたい誘惑さえ感じた。

「この言葉の起源になった、——ええと、マゾフと云いましたな。その人の小説は巧うまいんですか？」

「まあ、ことごとく愚作ですね。」

「しかしマゾフと云う人とはとにかく興味のある人格なんですか？」

「マゾフですか？ マゾフと云うやつは莫迦ぼかですよ。何しろ政府は国防計画よりも私娼保護ししょうほごに金を出せと熱心に主張したそうですからね。」

マゾフの愚を知った田中中尉はやっと保吉を解放した。もっともマゾフは国防計画よりも私娼保護を重んじたかどうか、その辺は甚だはつきりしない。多分はやはり国防計画にも相当の敬意を払っていたであろう。しかしそれをそう云わなければ、この楽天家の中尉の頭へんに変性慾たいせいよくの莫迦莫迦ぼかぼかしい所以ゆえんを刻きざみつけてしまうことは不可能だからである。……

保吉は一人になった後のち、もう一本バットに火をつけながら、ぶらぶら室内を歩みはじめた。彼の英吉利語イギリスを教えていることは前にも書いた

た通りである。が、それは本職ではない。少くとも本職とは信じていない。彼はとにかく創作を一生の事業とと思っている。現に教師になつてからも、たいてい二月ふたつきに一篇ひきずつは短い小説を発表して来た。その一つ、——サン・クリストフの伝説を慶長版の伊曾保物語風いそぼものがたりにちようど半分ばかり書き直したものは今月のある雑誌に載せられている。来月はまた同じ雑誌に残りの半分を書かなければならぬ。今月ももう七日なぬかとすると、来月号の締切り日は——弔辞ちようじなどを書いている場合ではない。昼夜兼行に勉強しても、元来仕事に手間てまのかかる彼には出上来るかどうか疑問である。保吉はいよいよ弔辞ちようじに対する忌いまいましさを感あじ出した。

この時大きい柱時計の静かに十二時半を報じたのは云わばニュウトンの足もとへ林檎りんごの落ちたのも同じことである。保吉の授業の始まるまではもう三十分待たなければならぬ。その間あいだに弔辞ちようじを書いてしまえば、何も苦しい仕事の合い間に「悲しいかな」を考えずとも好いい。も

つともたった三十分の間に資性穎悟にして兄弟に友なる本多少佐を追悼するのは多少の困難を伴っている。が、そんな困難に辟易するようでは、上は柿本人麻呂から下は武者小路実篤に至る語彙の豊富を誇っていたのもことごとく空威張りになってしまふ。保吉はたちまち机に向うと、インク壺へペンを突こむが早いか、試験用紙のフウルス・カッパへ一気に弔辞を書きはじめた。

×

×

×

本多少佐の葬式の日は少しも懸け価のない秋日和だった。保吉はフロック・コオトにシルク・ハットをかぶり、十二三人の文官教官と葬列のあとについて行った。その中にふと振り返ると、校長の佐佐木中将を始め、武官では藤田大佐だの、文官では栗野教官だのは彼よりも後ろに歩いている。彼は大いに恐縮したから、直後ろにいた藤田大佐

へ「どうかお先へ」と会釈をした。が、大佐は「いや」と云ったぎり、妙ににやにや笑っている。すると校長と話していた、口髭の短い栗野教官はやはり微笑を浮かべながら、常談とも真面目ともつかないよう
にこう保吉へ注意をした。

「堀川君。海軍の礼式じゃね、高位高官のものほどあとに下るんだから、君はとうてい藤田さんの後塵などは拝せないですよ。」

保吉はもう一度恐縮した。なるほどそう云われて見れば、あの愛敬のある田中中尉などはずっと前の列に加わっている。保吉は匆匆大股に中尉の側へ歩み寄った。中尉はきょうも葬式よりは婚禮の供にでも立ったように欣々と保吉へ話しかけた。

「好い天気ですなあ。……あなたは今葬列に加わられたんですか？」
「いや、ずっと後ろにいたんです。」

保吉はさっきの顛末を話した。中尉は勿論葬式の威厳を傷けるかと思うほど笑い出した。

「始めてですか、葬式に来られたのは？」

「いや、重野少尉の時にも、木村大尉の時にも出て来たはずですよ。」

「そう云う時にはどうされたのですか？」

「勿論校長や科長よりもずっとあとについていたんでしよう。」

「そりやどうも、——大將格になった訣わけですな。」

葬列はもう寺に近い場末ばすえの町にはいつている。保吉は中尉と話しながら、葬式を見に出た人々にも目をやることを忘れなかった。この町の人々は子供の時から無数の葬式を見ているため、葬式の費用を見積みつもることに異常の才能を生じている。現に夏休みの一日前に数学を教えきりやまる桐山教官のお父さんの葬列の通った時にも、ある家の軒下のきしたに佇たたずんだ甚平じんべい一つの老人などは洩団扇しふうちわを額ひたいへかざしたまま、「ははあ、十五円の葬とむらいだな」と云った。きょうも、——きょうは生憎あいにくあの時のように誰もその才能を発揮しない。が、大本教の神主おおもときようかんぬしが一人、彼自身の子供らしい白しろっ子こを肩車かたぐるまにしていたのは今日こんにち思い出しても奇観である。保

吉はいつかこの町の人々を「葬式」とか何とか云う短篇の中に書いて見たいと思ったりした。

「今月は何とかほろ、上人と云う小説をお書きですな。」

愛想の好い田中中尉はしつきりなしに舌をそよがせている。

「あの批評が出ていましたぜ。けさの時事、——いや、読売でした。後ほど御覧に入れましょう。外套のポケットにはいつていますから。」

「いや、それには及びません。」

「あなたは批評をやられんようですな。わたしはまた批評だけは書いて見たいと思ってるんです。例えばシェクスピアのハムレットですな。あのハムレットの性格などは……」

保吉はたちまち大悟した。天下に批評家の充満しているのは必ずしも偶然ではなかったのである。

葬列はとうとう寺の門へはいった。寺は後ろの松林の間に風いだ海を見下している。ふだんは定めし閑静であろう。が、今は門の中は葬

列の先に立って来た学校の生徒に埋められている。保吉は庫裡の玄関に新しいエナメルの靴を脱ぎ、日当りの好い長廊下を畳ばかり新しい会葬者席へ通った。

会葬者席の向う側は親族席になっている。その上座に坐っているのは本多少佐のお父さんであろう。やはり禿げ鷹に似た顔はすっかり頭の白いだけに、令息よりも一層慄慄である。その次に坐っている大学生は勿論弟に違いあるまい。三番目のは妹にしては器量の好過ぎる娘さんである。四番目のは——とにかく四番目以後の人にはこれと云う特色もなかったらしい。こちら側の会葬者席にはまず校長が坐っている。その次には科長が坐っている。保吉はちょうど科長のま後ろ、——会葬者席の二列目にズボンの尻を据えることにした。と云っても科長や校長のようにちやんと膝を揃えたのではない。容易に痺れの切れないように大胡坐をかいてしまったのである。

読経は直にはじまった。保吉は新内を愛するように諸宗の読経をも

愛している。が、東京乃至東京近在の寺は不幸にも読経の上にさえたいていは墮落を示しているらしい。昔は金峯山の蔵王をはじめ、熊野の権現、住吉の明神なども道明阿闍梨の読経を聴きに法輪寺の庭へ集まったそうである。しかしそう云う微妙音はアメリカ文明の渡来と共に、永久に穢土をあとにしてしまった。今も四人の所化は勿論、近眼鏡をかけた住職は国定教科書を諳誦するように提婆品か何かを讀み上げている。

その中に読経の切れ目へ来ると、校長の佐佐木中将はおもむろに少佐の寝棺の前へ進んだ。白い綸子に蔽われた棺はちようど須弥壇を正面にして本堂の入り口に安置してある。そのまた棺の前の机には造花の蓮の花の仄めいたり、蠟燭の炎の靡いたりする中に勳章の箱なども飾ってある。校長は棺に一礼した後、左の手に携えていた大奉書の帛辞を繰りひろげた。帛辞は勿論二三日前に保吉の書いた「名文」である。「名文」は格別恥ずる所はない。そんな神経はとうの昔、古い革

砥とのように擦すり減へらされている。ただこの葬式そうしきの喜劇きげきの中に彼自身も弔辞ひつじの作者さくしやと云う一役ひとやくを振ひられていることは、——と云うよりもむしろそう云う事実じじつをあからさまに見せつけられることはとにかく余り愉快えきげきではない。保吉たけきちは校長けいちょうの咳せき払いばらいと同時に、思おもわず膝ひざの上うへへ目を伏ふせてしまった。

校長けいちょうは静しずかに読みはじめた。声こゑはやや錆さびびを帯おびた底そこにほとんど筆ふで舌したを超越ちやうえつした哀切あいきの情なさけをこもらせている。とうてい他人たにんの作つくった弔辞ひつじを讀よみ上げていゝるなどは思おもわれぬ。保吉たけきちはひそかに校長けいちょうの俳優はいゆう的てき才能さい能に敬服けいぷくした。本堂ほんだうはもとよりひっそりしている。身動みぶきさえ滅多めつたにするものはない。校長けいちょうはいよいよ沈痛しんづうに「君きみ、資性しせい穎悟えいご兄弟ごうていに友ともに」と讀よみつづけた。すると突然とつぜん親族しんしゆく席せきに誰たれかくすくす笑い出でしたものがある。のみならずその笑い声わらいこゑはだんだん声高こゑたかになつて來きるらしい。保吉たけきちは内心しんぎよつとながら、藤田大佐ふじただいさの肩越かたこしに向むかう側がはの人々ひとを物色ぶつしやくした。と同時に場所柄ばしよがらを失うした笑い声わらいこゑだと思おもつたものは泣なき声こゑだつ

たことを発見した。

声の主は妹である。旧式の束髪を俯向けたかげに絹の手中を顔に当てた器量好しの娘さんである。そればかりではない、弟も——武骨そうに見えた大学生もやはり涙をすすり上げている。と思うと老人もしっきりなしに鼻紙を出してはしめやかに鼻をかみつづけている。保吉はこう云う光景の前にまず何よりも驚きを感じた。それからまんまと看客を泣かせた悲劇の作者の満足を感じた。しかし最後に感じたものはそれらの感情よりも遙かに大きい、何とも云われぬ気の毒さである。尊い人間の心の奥へ知らず識らず泥足を踏み入れた、あやまるにもあやまれない気の毒さである。保吉はこの気の毒さの前に、一時間に亘る葬式中、始めて悄然と頭を下げた。本多少佐の親族諸君はこう云う英吉利語の教師などの存在も知らなかったのに違いない。しかし保吉の心の中には道化の服を着たラスコルニコフが一人、七八年たった今日もぬかるみの往来へ跪いたまま、平に諸君の高免を請いたいと

思っているのである。……………

葬式のあった日の暮れがたである。汽車を降りた保吉は海岸の下宿へ帰るため、篠垣ばかり連った避暑地の裏通りを通りかかった。狭い往来は靴の底にしつとりと砂をしめらせている。靄ももういつか下り出したらしい。垣の中に簇った松は疎らに空を透かせながら、かすかに脂の香を放っている。保吉は頭を垂れたまま、そう云う静かさにも頓着せず、ぶらぶら海の方へ歩いて行った。

彼は寺から帰る途中、藤田大佐と一しよになった。すると大佐は彼の作った弔辞の出来栄えを賞讃した上、「急焉玉碎す」と云う言葉はいかにも本多少佐の死にふさわしいなどと云う批評を下した。それだけでも親族の涙を見た保吉を弱らせるには十分である。そこへまた同じ汽車に乗った愛敬者の田中中尉は保吉の小説を批評している読売新聞の月評を示した。月評を書いたのはまだその頃文名を馳せていた

N氏である。N氏はさんざん罵倒ぼとうした後のち、こう保吉に止めとどを刺して
いた。——「海軍××学校教官の余技は全然文壇には不必要である！」

半時間もかからずに書いた弔辞は意外の感銘を与えている。が、幾
晩も電燈の光りに推敲すいこうを重ねた小説はひそかに予期した感銘の十分の
一も与えていない。勿論彼はN氏の言葉を一笑に付する余裕よゆうを持つて
いる。しかし現在の彼自身の位置は容易いっしょように一笑に付することは出来な
い。彼は弔辞には成功し、小説には見事に失敗した。これは彼自身の
身になって見れば、心細い気きのすることは事実である。一体運命は
彼のためにいつこう云う悲しい喜劇の幕を下おろしてくれるであろう？

……

保吉はふと空を見上げた。空には枝を張った松の中に全然光りのな
い月が一つ、赤銅色しやくどういろにはつきりかかっている。彼はその月を眺めてい
るうちに小便をした気がした。人通りは幸い一人もない。往来の左
右は不相変あいかわらずひっそりした篠垣の一系列である。彼は右側の垣の下へ長な

がと寂しい小便をした。

するとまだ小便をしているうちに、保吉の目の前の篠垣はぎいと後ろへ引きあげられた。垣だとばかり思っていたものは垣のように出来た木戸きどだったのであろう。そのまた木戸から出て来たのを見れば、口髭ひげを蓄たくわえた男である。保吉は途方とほうに暮れたから、小便だけはしつづけたまま、出来るだけゆっくり横向きになった。

「困りますなあ。」

男はぼんやりこう云った。何だか当惑そのものの人間になったような声をしている。保吉はこの声を耳にした時、急に小便も見えないほど日の暮れているのを発見した。

(大正十三年三月)

本文書体 和字:SDときわぎロマンチック W3

漢字:游明朝体 M

公開 2021年9月25日

組版 今田欣一

底本:「芥川龍之介全集5」ちくま文庫、筑摩書房

1987(昭和62)年2月24日第1刷発行

1995(平成7)年4月10日第6刷発行

底本の親本:「筑摩全集類聚版芥川龍之介全集」筑摩書房

1971(昭和46)年3月～1971(昭和46)年11月

入力:j.utiyama

校正:かとうかおり

1999年1月8日公開

2004年3月10日修正

青空文庫作成ファイル:

このファイルは、インターネットの図書館、

青空文庫(<http://www.aozora.gr.jp/>)で作られました。

入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。